相互作用秩序としてのコミュニケーション

ゴフマンの視点から

Communication as Interaction Order

-from the viewpoint of Goffman-

宮内 正

Tadashi Miyauchi

Face-to-face communication in modern society is more than ever susceptible to many of socially-biased and media-influenced interpretations. Erving Goffman was one of the sociologists who tried to pin down the mechanism of such face-to-face communication in everyday life. Our effort here is first to review a couple of postmodern interpretations of Goffman's original work, and second to save the nature of social selves from the context of post-structuralist trend, and third to make clear the duality of social selves and definitions of situations, and finally to link the previous discussion with the basic views which Goffman sketched.

1. はじめに

「おそらく、その中で子どもたちがみな寒さにふるえている一つの大きな素晴らしい天幕よりも別々の衣服を一人ひとりにちゃんと着せるほうがよいのだ」(Goffman, 1961, p.11)。

ゴフマンの残した魅惑的なテキストは、その独特のスタイル故に、様々な解釈の余地を残している。ゴフマンの社会学的認識の方法は、一種独特で、謎めいてさえいるという論者もいれば、ある種の一貫性を見いだそうとするものもいる。したがって、ゴフマンの社会学の「性格」を規定しようとする試みは、ゴフマンの一見多面的にみえる自己呈示ゆえに、往々にして、その理論的(系譜的)かつ認識論的な多面性を列挙することから始めるのがいわば慣例となっている(シンボリック相互作用論、現象学的社会学、エスノメソドロジー、構造主義、実存主義、バークのドラマティズム、ラドクリフ・ブラウンの機能主義的人类学、G・H・ミード、デュルケム、ジンメル、シカゴ学派、ウォーナー、ベイトソン、言語行為論、社会言語学、など)。こうした慣例は、ゴフマンが、隣接領域をも含む様々な分野の成果を貪欲なまでに自らの理論の中に摂取しようとした事実を強調しようとするためであるには違いないのだが、じつは、ゴフマンの社会学的認識を特定の理論的な枠組のなかに位置づけようとするこれまでの試みが不成功に終わっているという事実を暗に物語っているのだといえよう。では、なぜそうした試みが失敗せざるをえなかったのか。それこそがゴフマンの戦略であったというポストモダンな解釈の可能性(ディコンストラクション)が残されているにしても。

たしかに、われわれは、ゴフマンの社会学的な洞察を通俗的なレベルにとどめようとする傾向に組するつもりはない⁽¹⁾。かといって、ゴフマンのテキストがもつ多義的な意味を一元化しようとする傾向に全面的に賛成することには些かのためらいがある。というの

は、何もゴフマンの著作を神聖化したいからではない。むしろ、ゴフマンの理論的成果を社会的に体系化しようとするとき、果して、従来の社会学の概念図式・認識枠組のなかに整合的におさまりきるのだろうか、という疑問があるからである。さらにいえば、ゴフマンの社会学が従来の（正統的）社会学に対するラディカルな批判を含んでいたとすれば、「社会的」体系化の試みは、ゴフマンの社会学に対する最も本質的かつ決定的な誤解を生むことにもなりかねない、という危惧があるからである。

2. 全体化的認識への懷疑から形式的関心へ

ーポスト構造主義的批判の可能性ー

ゴフマンの社会的認識は、社会的相互作用やコミュニケーションにおける内在的で自律的な規則や秩序の解明をめざすと同時に、その実質的な内容（実質的規則）ではなく、その形式的特徴の解明を目的としている。一見矛盾しているとも思えるようなこの二つの方向性をどのように和解させるかということが、ゴフマンのコミュニケーション論の重要な論点である（cf. Rossi, 1983; Jameson, 1976）。

こうした主題に取り組んだゴフマンの認識論的立場は、ポスト構造主義的思想の流れにある哲学者や批評家の視点にある点では共通するところがある。すなわち、全体化・普遍化を志向する認識の方法に対する懷疑の態度である。社会的現実を一個のテクストとして、そこに共時的な社会関係のシステムを読み取ろうとする認識方法を相対化しようとする態度である。これは確かに一つの有効な戦略に違いない。社会学者としてのゴフマンも、こうした認識論的立場にたって、理論化を進めたと考えることもできる。すなわち、彼は、社会学理論という一種の全体性に一定の留保を与えながらも、また、自らの著作（例えば、『枠組分析』）を社会的著作であると呼ぶことをためらいながらも、新たな社会的認識のあり方として、絶えずメタ・レベルへ超出しようとするメタ化の契機をはらんだ重層的な現実を捉える認識装置を提供しようとしたのである、と見ることもできる。

例えば、文芸批評家のジェイムソンは、ゴフマンの著作のなかに記号論的志向を読み取ろうとする。ゴフマンの用いる概念が独特のものであり、体系性を欠いている理由は、全体化的認識を拒否しようとするゴフマンの意図的な戦略によるものだという見解である。

「抽象化の過程にかかわる形式上の問題は、‘完全な言明’がなされたという幻想を与えてしまうという問題である」（Jameson, 1976, p.125）。したがって、ゴフマンの用語法そのものが、彼の認識論においてきわめて戦略的な位置を占めるのである。例えば、ゴフマンが用いている“key”という概念は、音楽における（長短の）調を指す概念であり、比喩表現として思想・表現・色彩などの基調や様式を表わすさいにごく普通に用いられるものである。ゴフマンは、このありふれた日常的概念・民俗的概念を“keying”というように動名詞化することによって、日常生活者としてのわれわれに理解可能な概念操作に変えたのである。対象とする社会的現実の中で意味をもつ常識的カテゴリーを、（一定の意味体系に裏付けられた）その隠喩性を消去することによって、メタレベルへの超出を可能にする記号論的概念操作として用いることを可能にしたのである。ここでは、記号論的変換の過程そのものが重要なのであって、その変換された素材（実質）そのものは重要ではなくなる（Jameson, 1976, p.119）⁽²⁾。

たしかに、ゴフマンの中に、記号論的志向性を見だし、そこにある種の戦略的意図（例えば、近代的諸制度に対する批判や「主体」の解体）を読み取ろうとすることは可能で

ある。「完全な説明」を与えようとする社会学的な言説が、一つの制度的なもの（権力）を作り出してしまうという問題に自覚的であったという解釈も成り立つ。だからこそ、『枠組分析』を社会学的著作と呼ぶことをためらったり、機能主義理論、機能主義的役割理論、構造主義、現象学的社会学、エスノメソドロジー、などに対して批判的であったりしたのだともいえる。しかし、ゴフマンの記号論的志向を、メタ化への契機を捉えようとする戦略的意図（あるいは言語批判）によって説明するだけでは、社会学的にはあまり生産的であるとは思えない。というのは、こうした解釈と、ゴフマンの著作に一貫して見られる「自己」への関心とが、果してうまく折り合いがつかののだろうか、という疑問に十分に答えていないからである。

ポスト構造主義における言語論的な象徴体系批判という主題は、「近代的自己」の相対化・差異化という戦略を呈示することはできるとしても（差異化の戦略としてのドラマツルギー）、それが戦略として呈示される限りにおいて、その戦略の過程で現われる分裂した「自己」や「自己」の複数性と、現実の社会的相互作用のなかで要請される「自己」呈示との対立・葛藤にどう対処すべきかという戦略を呈示しきれない限界をもっているように思われる。たしかに、ポスト構造主義の差異化の戦略の中に、「近代的・主体的自己」の影を見いだしてそれを批判することもできよう。しかし、そうした批判・反批判の応酬という悪循環を避ける意味でも、むしろ、問題の本質は、「近代的自己」を批判しようとする「自己」の差異化という戦略（「実践的意識」（Giddens,1984）というレベルでの戦略も含めて）と、「近代的自己」の影を消し去ることのできない現実の「社会的自己」との摩擦をどのように切り抜けていくかという点にある。すなわち、日常的現実として存在する社会的相互作用の規則や秩序との対立・葛藤という主題である。果てしない「自己」の差異化は、それが「戦略」という名のもとに特権化された「（イメージとしての）対他的自己」として一定の象徴体系によって支えられているものであればなおさら、現実の社会的相互作用の規則において要請される「個性をもった存在としての人間」（人格崇拜の対象）とのあいだになんらかの緊張関係を引き起こさずにはおかぬであろう。そして、この社会的相互作用の規則は、後にみるように、戦略としての「差異化」を阻止する働きをするものであったり、「差異化」そのものを「ひとつのスタイル」として理想化しようとするメカニズムを間接的に支えるものであったりするのである。

3. 「社会的自己」の二重性と逆説性

ゴフマンにおける一つの主題である、対他存在としての「（演じられる）自己」をめぐる論議（とくに『自己呈示』など）は、上述のポスト構造主義的な枠組みからみると、「近代的自己」や「主体」に対する批判（あるいは、独我論批判（Verhoeven,1985,p.97））から具体的・実証的な相互作用のレベルの問題への視点の移動として解釈することもできる。すなわち、「近代的自己」を支えてきた近代的諸制度としての象徴体系（あるいは言語）に対する批判を、その象徴体系が具体化される実際の場面に向けたのだという見方である。体系性を批判しようとする戦略的態度が、その体系性の具体的表現としての相互作用場面における規範・規則（遍在する権力）に対する批判へと向かわせたという解釈である（ラングからパロールへ）。

しかし、ゴフマンの内在的論理を辿ってみると、「近代的自己」の逆説性を具体的相互作用のレベルで批判しようとしたというよりも、個々の対面的状況において「社会的自己」

は不可避免的に「逆説的性格」や「二重性」を担わなくてはならないという認識から出発したのだということがわかる（こうした意味で、ゴフマンの理論の中に、体系や制度に対する批判的契機を読み取ることはむずかしいといえよう）。もちろん、こうした「二重性」や「逆説性」という視点は、社会的制度や社会的相互作用の規定因が、不可視の否定的存在であり、違反、逸脱、定式化不能の事例をあげることによってはじめて認識できるものだという、ゴフマンの特有の「不調和の視点」として説明することもできる。しかし、ゴフマンの社会的相互作用に対する見方（例えば、社会的相互作用、状況の定義、社会的自己などの概念規定）そのもののに、こうした「二重性」「多元性」「逆説性」が内包されているのだというほうがよりの確であろう。すなわち、ゴフマンは、当初から、「自己」とその周囲の「状況」との関係についての考察に的を絞り、その具体的状況から、「自己」や「状況」が分裂・多元化していくことをあきらかにしようとしたのである。したがって、「自己」の逆説性は、「近代の自己」のそれとしてではなく、むしろ具体的状況の中で個人が担わなければならない逆説性として位置づけられているのである。

ゴフマンによれば、「自己」について一定の他者認識を引き出す「状況の定義」とは、一定の社会的特性をもつ「演じられる自己」どうしの対面的相互作用を規定する道徳的規則（この意味では規範的な状況定義）である。とすれば、「役柄からはずれたコミュニケーション」、「分裂的役割」あるいは「印象操作の技法」などをこの「状況の定義」においてどのように位置づけたらよいのかという疑問が生じる。換言すれば、ある単一の「状況の定義」を維持しながらも「役柄からはずれたコミュニケーション」をおこなう個人というものをどう位置づけたらよいのか、という問題である。たとえ「役柄からはずれたコミュニケーション」をおこなうのは、個人が情報制御能力の不安定な心理＝生物学的自己であるからだと考えたとしても、最初に投企された「状況の定義」をなおも維持しようとする動機なり要請をどこに見いだせばよいのだろうかということである。ゴフマンに即して答えるならば、それは、「状況の定義」そのもののなかにある、ということになる。すなわち、「状況の定義」の道徳的性質とは、他者に対して「自己」を「演じられた自己」として認識するように義務づけるものであるとされる。とすれば、「役柄からはずれたコミュニケーション」それじたいも「状況の定義」によって要請されたものであるということになる。本来、「状況の定義」には、「演じられた自己」によって矛盾や不信や疑念を引き起こしてはならないという道徳的要請がある。もしそうであるとするならば、かえって状況についての多元的な定義を必要とするのではないだろうか（Goffman, 1959, p. 202.）。ましてや、個人が自分で「役柄」を解釈することはないというのだからなおさらである。

このように、「社会的自己」が「状況の定義」（あるいは、「表出的秩序」、「枠組」、「相互作用秩序」）において担っている（担わされている）逆説的・二元的性格という主題（「自己」が崇拝の対象であると同時にその司祭でもあるということ）は、「状況（の定義）」じたいの二重性（多元性）という問題へと展開するのである⁽³⁾。

4. 「状況」の二重性

たしかに、ゴフマンが「社会的自己」の逆説性を論じるとき、そこには「状況の定義」の多元性という問題が隠されているといつてよいだろう。例えば、ゴフマンは、『役割距離論』において、ある規範的役割（例えば、外科医）を真面目にかつ円滑に遂行しようとおもえば、その状況（例えば、手術）における状況的役割（手術チームのメンバーの緊張

を解くために冗談をいうこと）を演じなくてはならないことがあるという。規範的役割を遂行しようとする個人は、その規範的役割に即した「状況の定義」に従おうとすると同時に、実際の遂行場面では、「状況的役割」（例えば、「役割距離」）を要請する状況的活動システムにおかれる。ここでいわれている「状況の定義」の多元性は、個人の「転調操作（keying）」や「虚偽操作（fabrication）」にかかわる現実の多元性という意味ではなく、道徳的要請としての「状況の定義」と、心理＝生物学的存在としての人間が置かれる「状況的活動システム」との二重構造という意味である。これは、デュルケムのいう人格崇拜の概念に基づいて「自己の儀礼的役割」の二重性（Goffman, 1967, p. 31）を説いて以来、一貫してゴフマンが前提としてきた考え方である。ゴフマンが、「自己」は崇拜の対象（「イメージとしての自己」）であると同時にその司祭者（「プレーヤーとしての自己」）であるといい、「演技者としての個人の属性は、個々の演技（＝遂行）に示された結果であるばかりでなく、本来心理的＝生物学的であり、しかも演じられている種々の偶発的な出来事との密接な相互作用から生じるように思われる」（Goffman, 1959, p. 253）というとき、完璧な表出制御能力を持ちえない心理＝生物学的な存在としての人間がつねにその理論の前提におかれていた。規範的な「状況の定義」によって与えられる「イメージとしての自己」と、コミュニケーション論という次元からみた自己補整的な状況的活動システムによって要請される「プレーヤーとしての自己」（表出統制能力）とによって二元的図式が作られるのである。したがって、ここでいう「状況」の多元性は、さしあたり「状況」の二重性と言い換えておかなければならない。

一方、リオタールのように、ゴフマンの対面的コミュニケーションを「言語ゲームの異型性（異種混在性）」という視点から捉えようとするものもある。リオタールによれば、対面的コミュニケーションは、本来的に、異質な言語ゲームを含んでいて、行為者は異なる言語ゲームのあいだを絶えず移行しているという。「言語ゲームの異型性を認めることはこの『正義の理念と実践の』方向への第一歩である。それが含意しているのは、言うまでもなく、言語ゲームの同型性の実現を仮定し、その実現を試みるテロルを放棄することである。第二の歩みは、もしそれぞれのゲーム、またそこで打たれる《手》を定義する規則についてコンセンサスが成り立つとしても、そのコンセンサスはローカルでなければならない。言い換えれば、その場のパートナー同士によって得られるもの、万一の場合には解除可能なものでなければならないという原則である」（Lyotard, 1973, pp. 161-2.）。対面的コミュニケーションとは、異質な言語ゲームの存在に対して、パートナー同士のローカルな合意というかたちで言語ゲームの同型性を実現しようとする試みであるといえよう。やはりここでも、異質な言語ゲームが存在するという本来的な状況と、当事者間の一時的な合意として特定の言語ゲームが実現される状況との、二重構造がある。

また、リオタールの視点は、「状況」の二重性についてもうひとつの考え方があることを示唆している。すなわち、言語ゲームの異種混在性を前提とする彼の考え方は、ゴフマンの「用法の二重性」（Goffman, 1983, p. 4）という考え方に結びつくように思われる。ゴフマンの説明によると、例えば、われわれにとっては相手の行為が攻撃的に見えても、相手にとってはその行為がわれわれとの緊密な結びつきを示す行為であるということがある。あるいは、「われわれからみれば厚かましい行為に見えても、われわれがそれを申し出るときには、好意や愛情の印である」（Goffman, 1983, p. 4）。このように、受ける側と与える側とでは、行為の意味解釈が異なる場合があるという。ゴフマンの対面的コミュニケーションに対する基本的な考え方の中には、こうした立場の違いによる「状況」の二重性が

ある。このことをゴフマンは、われわれの経験の「対決的特性 (confrontational character)」という (Goffman, 1983, p.4)。また、この二重性は、見かけの合意 (working consensus) の陰でお互いに対立する動機をめぐって「複雑な動機のゲーム」 (Goffman, 1983, p.5) が争われるという意味に解することもできる。換言すれば、「状況の定義」という規範的合意のもとには、すべての対面的コミュニケーションに見られるとはいえないせよ、対面的コミュニケーションの非対称性が隠されているということである。また、ゴフマンは、こうした「状況」に対する二重性や非対称性の認識があったからこそ、相互主観性や行為者の動機によるアプローチを敬遠したり、一元的な現実観を否定したのだという見方もできる。このことは、社会調査におけるインタビューや臨床的な面接にかんする問題とも深くかかわる問題である。

このように、対面的コミュニケーションにおける「状況」の二重性は、「状況の定義」と「状況的活動システム」との二重構造として位置づけられる一方で、その「状況の定義」という規範的合意のもとで「複雑な動機のゲーム」が展開されるという二重性を含んでいる。例えば、ある規範的な「状況の定義」を維持しようとして演じられる「役割距離」が、相手の敵対的な動機によって期待どおりの効果をあげることができないということも、ごく普通に起こる。そういう意味では、「状況の定義」は、規範的ではあっても、対面的コミュニケーションにおける非対称性ということを考えるとときわめて不安定で壊れやすいもののだといえよう。したがって、「状況」の二重構造のひとつである「状況の定義」が脆弱であったとしたら、その「状況の定義」によって与えられる「対他のイメージとしての自己」もそれだけ壊れやすいものとなるに違いない。とすれば、その「イメージとしての自己」を演じきろうとするには、見かけの合意として存在するはずの「状況の定義」を信じるよりほかないという事態も十分に考えられる。そして、行為者は自らが思い描く「対他のイメージ」に従って演じ続けるだけである。こうした不安定な「状況の定義」を前提とするかぎり、個人は自分の想定する「自己イメージ」を絶えず変化させていくか、ある「自己イメージ」を執拗に守り続けていくか、のどちらかしかない。ゴフマンは、「状況の定義」の脆弱性があるかぎり、演劇論的アプローチが独我論的にならざるを得ないことに気がついていた。だからこそ、「相互作用秩序」という新しい領域の研究に乗り出したのである。

5. 「相互作用秩序」

もし、「状況の定義」が不安定で非対称的であり、「状況の定義」のもとらす「対他のイメージ」が単なる行為者の想像上の「対他のイメージ」にすぎないとすれば、「状況の定義」の概念を支持することは難しい。ゴフマンは、そこで、もうひとつの「状況」概念である「状況的活動システム」に注目したといえよう。この「活動システム」とは、本来、心理的＝生物学的存在としての個人にかかわるシステムであったが、ゴフマンが「相互作用秩序」という「それ自体実質的な領域」も「活動システム」概念の系譜に連なるものといえよう。したがって、社会的相互作用も、「二人以上の個人が互いに反応しあえる範囲にいる社会的状況、すなわち環境、においてのみ起こるもの」 (Goffman, 1983, p.2) と定義され、二人以上の個人が物理的に共存している状況が必要条件とされる。こうした相互作用秩序の研究は、その内部にある要素間の関係のほうが、その秩序の外部にある要素 (例えば、社会学変数や社会構造的指標) との関係よりも、密接であるという前提から出

発する。ところが、他者との物理的共存という事実がもたらす結果が、社会構造の指標・表現・徴候（例えば、年齢、性別、人種、階級など）であるかのように扱われてきたのだという。たまたまその状況にあったもの（the merely situated）が、状況的なもの（the situational）として論じられることに対して、ゴフマンは不満を表明する。というのは、相互作用に特有の過程や構造がないがしろにされるからである。例えば、時間的・空間的な境界、参加者の専心や関与、感情・気分・認知・身体的な定位（生物体が自己の体軸が特定方向に向くように体位を定めること）・筋力といったものである。たしかに、社会構造が対面的相互作用に依存し、左右されるということは指摘できるが、マクロ社会学的な特徴が出会いの現実にもまで遡れるという還元論的な立場は取らない（Goffman, 1983, p.8）。したがって、社会生活においては、外見やマナーが地位や関係の証拠となることもあれば、視線や関心の強さや最初の行為のかたちなどがわれわれの意図や目的を推測させることもあるのだという（Goffman, 1983, p.3）。言葉や身振り表現が起こる相互作用の様式を、その言葉や身振りの意味と混同してはならないという（Goffman, 1983, p.8-9）⁽⁴⁾。「要するに、相互作用秩序における相対的に自律的な生活様式について語ることは、なにかしら先験的で、根本的で、巨視的現象の姿を構成するものとしてこうした様式を唱えることではない。そうすることは、劇作家、臨床心理学者、そして有能なインフォーマントたちの自己中心的なゲームに等しい。彼らはすべて、個々の登場人物の内部にある力が行為を構成したり支配するように物語をうまく作り上げるので、聞き手や読み手はその結末に喜んで自分を同一視することができる」（Goffman, 1983, p.9）。すなわち、ゴフマンは、「状況の定義」の不安定性を論じてきた経験を踏まえて、ある相互作用上の行為に対して「対他的イメージ」（あるいは社会学の変数の指標）を付与することは、いわば観察者や研究者の側の「認知的関係」の図式（意味の枠組）に恣意的にあてはめようとするにほかならない、という。ゴフマンは、いわば戦略的に、まず最初に対面的相互作用のなかに自律的・内在的な様式が存在することを仮定し、その方針に沿って考察を進める。それは、いわば研究者（あるいは相互作用の参加者）の側の認知関係に無理に当てはめようとするのを避けるためである。無理に当てはめようとするれば、それはいわば「自己中心的ゲーム」のなかに強引に引き入れることと同じである。「状況の定義」などの論議を通じて、ゴフマンは、相互作用の当事者同士が共通の「状況の定義」を維持していたとしても、そのことを当事者はもちろんのこと、研究者がそのことを確かめたりすることはできないし、ましてや、その推定された「定義」によって与えられる「イメージ」や「意味」はなおさら信用することはできないのだ、という。「複雑な動機のゲーム」が展開されている相互作用について、参加者の動機や「意味」を推測するなどということは、研究者の勝手な思い込みであり、押し付けにすぎないのだと、いわんばかりである。

6. 結論

社会的相互作用を自然主義的に分析しようとするゴフマンにとって、状況の二重性という主題は、重層化する多元的な現実としてよりも（『枠組分析』）、また、言語ゲームの異質性や「動機のゲーム」や極端な状況主義（Goffman, 1983, p.4）としてよりも、たまたまその状況におかれたもの（「単純状況」）と状況的なもの（「共同状況」）との二元性として論じられる。ここにゴフマンの独自性がある。そして、その独自性を支えているのは、社会的相互作用や対面的コミュニケーションの「状況」を「一元的」に捉えようとする

るあらゆる試みを懐疑しようとする姿勢である。現代社会では、例えばゴフマンがサービス場面について考察したように、対面的コミュニケーションにおいて見かけの平等化が進めば進むほど、利害の絡んだ「複雑な動機のゲーム」は背景に押しやられ、対面的コミュニケーションそのものが、その場で実際に起こっていることによって維持されるのではなく、社会的属性の影響をできるだけ排除するという一種の「状況の一元化」によってはじめて成立するという逆説的な現象が起きている（Goffman, 1983, p.15-6）。ゴフマンはわれわれの身近なところで起こっているこうした「状況の一元化」を解明しようとしたのである。

〔註〕

（１）例えば、ギデンスによると、ゴフマンは、少なくとも四つの点で誤解されてきたという（Giddens, 1987, pp.111-4.）。１）「ゴフマンの著作は、社会生活の瑣末的な特徴にかんする独特な観察を並べたものにすぎない」。２）「アメリカの白人中産階級のモーレスについての冷笑的な観察者にすぎない」。３）ゴフマンの著作に描かれている行為者は、「他者の目をうまくだまして自己を呈示することで自分の虚栄心を癒そうとする単なる「演技者」」である。４）「ゴフマンの著作は、あたかも一つの民族誌、すなわち一つの文化人類学、であるかのように誤って紹介されることがある」。ギデンスは、こうした誤解の一つ一つを丹念に正そうとする。しかし、ギデンスのこうした努力が、ゴフマンの意図に即したものであるという保証はどこにもない。

（２）また、ゴフマンを「記号論的構造主義者」と見なす論者もいる（Rossi, 1983, pp.239.）。ロッシは、基本的には、ゴフマンの視点が構造主義的である点を評価する。すなわち、「こうした視点は、意味の構成的研究をコードのレベルへと拡張することができる。相互作用の構成的規則は、現象学者によって意識的志向性のレベルに、エスノメソドロジストによって状況的過程のレベルに、位置づけられている。ゴフマンの基本的な意図は、意味の意図的過程と解釈規則を（潜在）能力ないし構造的コードのレベルに基礎づけることのようなのである。こうした計画は、伝統的な（それ故に経験主義的）志向をもった解釈的パラダイムの視野をかなり越えるように思われる」（Rossi, 1983, pp.239.）。ロッシは、ゴフマンに対してこうした肯定的評価を与える一方で、ゴフマンの経験主義的な点には否定的である。経験主義はなぜ駄目なのか。ロッシには、ゴフマンがなぜこのように相矛盾した視点を取ったのかという点についての内在的な考察が不十分であるように思われる。また、主観性と構造の弁証法的関係による社会的構成過程という視点から論じようとするロッシにとって、ゴフマンのアプローチの非弁証法的性格も一つの理論的限界と映るようである。

しかし、ゴフマンによれば、相互作用の規則は、一元的現実を構成する構成的規則とは必ずしもなりえない。ゴフマンは、そうした相互作用規則が、いわば、自律的な空間における規則であることを主張しようとしたのである。したがって、相互作用の規則が単純に構造的コードとして行為者の能力として獲得されるものだとは言いきれない。その意味では、ゴフマンのアプローチが弁証法的契機を欠いているといわれてもその通りであるといえようがないのである。

（３）筆者はかつて、役割距離が役割化するという独自の解釈のもとに、「状況の多元化」について論じたことがある（宮内, 1988）。

（４）ギデンスによれば、ゴフマンがみつけた諸特性は、彼が認めるよりも、制度の再生産に大きく関係している。「社会構造に対する状況的效果」というように、状況的相互作

用と社会構造を別の現象として見ることは正しくない。というのは、社会体系の構造的特徴の再帰的特性をみればわかる。そのもっとも分かりやすい例が言語であるという。会話は、単に、言語の状況的な表現ではなく、全体的形式としての言語が存在するための主要な手段なのである。言語の全体的な構造的特徴、すなわち言語使用にかんする規則や一般化された手続きは、個々の主体の特性ではなく、非常に長い時空間にわたって存在する言語共同体の特性なのである。こうした特性についての知識は、会話を生成させる手段であるが、一方、会話を起こさせるために用いられる状況的要素が、構造化された形式としての言語の姿を再生産するのである（Giddens, 1987, p.135）。こうしたギデンスの見解は、再帰性（言語学、とくに言語能力と言語運用との関係について言われるもの、生成文法もこの考え方である）という概念を中心に置いている。しかし、ラングとパロールや、構造と実践を媒介するものとしての再帰性（反復性）は、何によって保証されるのか。それは、体系化されたものとして（構造化されたものとしての）言語の（潜在的）知識によってしか保証されないのではないのか。本来の意味での状況的要素そのもの（すなわち、知識化していないもの、意図的コントロールができないもの）は、常に不確定なものでしかないのではないのか。例えば、気分・感情・身体的要素など。従って、言語の再帰性を保証する知識や、社会的属性にかんする認知的要素などのいわゆる状況外的要素が構造化を引き起こすといえないだろうか。例えば、言語記号とその意味との間に（状況的要素を除外して）対応関係を見ようとするときにはじめて、ある社会関係や社会構造が再生産されるのである。換言すれば、状況に状況外的要素が介入することによって再生産が生じるのであって（状況の意味が一元化する）、相互作用の形式そのものが直接的に社会構造を再生産するとはいえないのではないだろうか。

【参考文献】

- Denzin, Norman K and Charles M. Keller, 1981, "Frame Analysis Reconsidered," *Contemporary Sociology* 10:52-60.
- Ditton, Jason (ed.), 1980, *The View from Goffman*. Macmillan.
- Durkheim, Emile, 1898, "L'individualisme et les intellectuels," [小関藤一郎訳『デュルケーム宗教社会学論集』行路社, 1983]
- Durkheim, Emile, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*. Paris. [古野清人訳『宗教生活の原初形態（上・下）』岩波文庫, 1977]
- Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society*. Cambridge: Polity Press.
- Giddens, Anthony, 1987, *Social Theory and Modern Sociology*. Cambridge: Polity Press.
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Doubleday Anchor. [石黒毅訳『行為と演技』誠信書房, 1974]
- Goffman, Erving, 1961, *Encounters*. Indianapolis: Bobbs-Merrill Company, Inc. [佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い』誠信書房, 1985]
- Goffman, Erving, 1961a, *Asylums*. New York: Doubleday & Company, Inc. [石黒毅訳『アサイラム』誠信書房, 1984]
- Goffman, Erving, 1963, *Stigma*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall. [石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房, 1970]
- Goffman, Erving, 1963a, *Behavior in Public Places*. Glencoe: The Free Press. [丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造』誠信書房, 1980]

- Goffman, Erving, 1964, "The Neglected Situation," *American Anthropologist* 66(no.6, part 2):133-6.
- Goffman, Erving, 1967, *Interaction Ritual*. New York: Doubleday Anchor. [広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局, 1986]
- Goffman, Erving, 1971, *Relations in Public*. New York: Basic Books.
- Goffman, Erving, 1974, *Frame Analysis*. New York: Harper and Row.
- Goffman, Erving, 1981, *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goffman, Erving, 1981a, "A Reply to Denzin and Keller," *Contemporary Sociology* 10: 60-68.
- Goffman, Erving, 1983, "The Interaction Order," *American Sociological Review* 48:1-17.
- Goffman, Erving, 1983a, "Felicity's Condition," *American Journal of Sociology* 89:1-53.
- Gonos, George, 1977, "'Situation' versus 'Frame': The 'Interactionist' and the 'Structuralist' Analyses of Everyday Life," *American Sociological Review* 42:854-67.
- Helle, H.J. and S.N. Eisenstadt (eds.), *Micro-Sociological Theory: Perspectives on Sociological Theory Vol.2*. London: Sage.
- Jameson, Fredric, 1976, "On Goffman's Frame Analysis," *Theory and Society*, 3:119-33 (Vol.3, No.1).
- 架場久和, 1981, 「近代的自己とアンビヴァレントなく状況」『現代社会学』16:25-39.
- Lyotard, Jean François, 1979, *La condition postmoderne*. Paris: Éditions de Minuit. [小林康夫訳『ポスト・モダンの条件』書肆風の薔薇, 1986.]
- MacCannel, Dean, 1983, "Commemorative Essay: Erving Goffman(1922-1982)," *Semiotica* 45-1/2:1-33.
- 宮内 正, 1988, 「社会的相互作用と社会的自己 ―ゴフマンの視点から―」『応用社会学研究』（立教大学社会学部研究紀要）29:83-102.
- 大村英昭, 1985, 「ゴフマンにおける<ダブル・ライフ>のテーマ」『現代社会学』19: 5-29.
- Rossi, Ino, 1983, *From the Sociology of Symbols to the Sociology of Signs*. New York: Columbia University Press.
- Verhoeven, Jef, 1985, "Goffman's Frame Analysis and Modern Micro-Sociological Paradigms," in Helle, H.J. and S.N. Eisenstadt (eds.), *Micro-Sociological Theory: Perspectives on Sociological Theory Vol.2*. London: Sage.